心理臨床家の養成について

話題提供者：川畑直人
（京都文教大学）

よろしくお願いします。川畑です。養成訓練ということですが，私の経験，4年間アメリカの精神分析の研究所で，精神分析家になるトレーニングを受けてきた経験から今までのお話について，少し相対化する方向で，視点を提供できればと思っています。

私自身の経験は，4年間ホワイト研究所という精神分析の研究所の訓練です。精神分析の訓練は，自分自身の精神分析を受ける，いわゆる教育分析と，自分が精神分析をする，しつつスーパーヴィジョンを受ける，その2つとですね。あと，理論的な勉強をするコースワークと，その3本立てでされているというのがどこの研究所でも一緒だと思うんです。ホワイト研究所というのは，サリヴァンとかフロムといった人たちによってつくられた，対人関係論の理論をバックグラウンドに持つ研究所なんですが，ひとつの特徴として，この研究所は，発足当時からですね，心理学者を受け入れていたという経緯があります。エリッヒ・フロムがお医者さんではなくて，心理学者だったという，社会学者というか心理学者だった。当時アメリカの精神分析学会は，医者でなければトレーニングを受けさせないという，医師以外の訓練を排除するという取り決めを決めていましたので，心理学者がそういう訓練を受けるということはできなかったんですね。ところがたまたま，このエリッヒ・フロムの存在に加え，いろんなポリティカルな，理論的な背景からですね，この研究所では，従来から心理学者を受け入れていていました。現在のアメリカですが，1980年代に心理学者がですね，精神分析のトレーニングを受けられないというのはおかしいということで，分析協会を相手取って訴訟を起こして，それに勝つという，そういう出来事があって，以後医師以外にも開かれてきたという経緯があります。それに加えて現在の状況では，医学の状況が非常に生物学主義的な方向に流れているということと，保険なんかの制度の変化ということで，精神分析を勉強するお医者さんが非常に少なくなって，相対的に分析家のトレーニングを受けるという人は，心理学者，あるいは，ソーシャルワーカーが主流になっています。

それで，分析家になるための訓練ですが，かなりインテンシブで，週に3回，4回，分析を自分自身で受けながら，コースワークは夜にあるわけなんですが，要するに夜間学校なんですね。例えば僕の同級生で，クラスにいた人たちは，全員がサイコロジストで，ライセンスド・サイコロジストという形で，クリニカルサイコロジーの資格を持った人で，だいたい40歳くらいですから，いろんなかたちで，病院とか個人開業など仕事をしていて，さらに，高度なトレーニングを受けるということで，研究所に来て研修を積むというかたちです。

じゃあ，ライセンスド・サイコロジストになるためには，アメリカではどういう勉強をしなくちゃいけないかということですが，基本的にはPh.Dをとるということですから，大学院博士課程5年間で博士論文を書き上げて，さらにインターンシップなどでいろんな研修を受けて，ということで試験を受ける。試験は臨床心理学に限らず，産業心理学とか実験心理学とかいろんな領域から出されるようで，かなり大変のようです。ですからこれは，特定の学派とか，心理療法の学派に偏らない，まさに心理学全体の知識を持っている人というものを認定するという，そういう資格が，ライセンスド・サイコロジストであって，その資格をもって，保険も適応されるひとつの社会的な専門職の活動が可能になるということです。そういう人たちの中で，さらに，精神分析家になろうという人が，そういうふうに研究所に入ってくるというのが，アメリカのシステムです。こういう状況を体験して，分析のトレーニングだけでなく，それを取り囲むシステム全体を振り返ってみたときに，どう見えてくるのかというのをまず考えてみたいんです。

1つにはですね，まず，トレーニングを受けに来ている人たちがライセンスド・サイコロジストだっていうの

は，日常感覚のレベルである種の親しみを感じるものがありました。というのは，そういう人たちはみんな心理学のコースを通ってきてますから，「大学で統計やってて結構苦手だったよね」とかですね，「研究調査が大変だったけど，がんばってやった」とか，そういう話が出るとですね，「あー，俺もやってたやってた」という感じで，国を超えて，結構心理学のバックグラウンドで同じ事に苦しんだり，同じ事に興味を持ったり，同じ経歴を持ってたり，なんかそういう親しみみたいなものを感じることがありました。日常レベルでの，同朋意識というか，そんな感じがあったのは事実です。

ここで，日本との差というものを考えた時に，あるいは今後の日本の心理臨床家というか，臨床心理学，臨床心理士の関係ということで比較してみると，まず，一番言えることは，日本の社会は非常にフォアクロージャーな社会だという，そういう印象を持ちました。つまり5年間の博士課程を経てから実践にはいり，さらにその上に高度なトレーニングのシステムがあるというのに比べるとですね，やはり先ほど深津先生もおっしゃってましたけども，職業専門人として，修士課程2年で資格が出るようなかたちで，はたしてどれだけの事がそこでできるんだとか，さらに，研究者としての側面というのはどうなるんだろうか，とかですね。専門家として共有される基礎的な素養というのは何なんだろうとか。いろんな疑問が起こってくるわけです。今回はこのシンポジウムが心理学会で行われているんで，私としては，心理学の，心理学全体の先生方がですね，その問題についてどう思われているかということを少し聞けるのかなと期待していたんですが，アメリカの場合ですと，心理学会APAが，臨床心理学のライセンスについてかなり関与していて，さっき言いましたように，試験問題も全領域をカバーしていますし，大学院教育のあり方にしても，ジェネラルにいろんな視点を学ぶ，いろんな見方，考え方がある，そういうことを学ぶことが重要であって，特定の学派の人たちだけが集まって大学を構成してしまうというのがいいのかどうかという点では，アメリカの選択としては，APAが各大学の臨床心理学学位プログラムに対して，ある程度査察というか，チェック機能を果たしているようです。つまり，大学院では基礎的な部分がおさえられて，資格を取った人がさらに自分の学派を選択すればいいと，そういうかたちになっている。その辺が日本の場合どうなのか，ということ。

ただですね，そうは言っても，現実は，アメリカのシステムでやれば問題が解決されるのかどうかというのはわかりません。1つは現実面ですけども，やはり，サイコロジストというのは，これは日本でも似ているのかも知れないんですが，政治的感覚が弱いみたいで，職業集団としての力が発揮されていないようです。一方で，お医者さんの方はしっかりステータスを作っていて，で，また，マスターレベルで取れる資格としては，ソーシャルワークの資格があって，病院なんかでは，同じ人を雇うんだったら，ソーシャルワーカーのほうが給料が安いしいいんじゃないかというふうになっているようです。だから，実際にセラピーをする人はソーシャルワーカーで，管理職レベルでサイコロジストが1人か2人いればということになりがちだそうです。さらに，サイコロジストもいらなくて，その辺はお医者さんがいればいいというかたちでやっています。サイコロジストは，実際には高学歴を抱えた専門職ということを掲げているわけだけれども，なかなか社会的な地位を築くという意味では，あるいは職業団体としては，それほど成功していないという現実があるようです。日本の選択としては，修士レベルの資格だってことは，ある意味で社会の要請にこたえて，それに必要性があるからということでの選択ではあるわけですけれども，逆に言えば，その，水を薄めて外に出してしまうということの問題とか，さっき言った，早期完了で終わってしまうということの問題というのも，やはり考えなくてはいけないと思いました。

それから，特に私は精神分析の研究所に行っていましたから，臨床心理学という，あるいは心理学，サイエンスとしての心理学というものと，臨床実践の中で起こってくる，非常に，なんと言うのかなぁ，サイエンスでは抱えきれないものというものの，この2つをどういうふうに考えていくのかということに関心があるんですが，アメリカのほうでも，必ずしも，統合されているとはいえないというふうに感じます。というのは，要するに，博士課程を出て，研究もして，ライセンスを取るまではそういうジェネラルな，サイエンスとしての心理学を一

応学ぶけれども，その後に精神分析のトレーニングに入ってですね，アカデミズムというか，実証科学の世界からは離れるということで，ある種のスプリットみたいなものがあるんではないか。この辺のことが，心理学の中で十分統合されているかどうかというのは，若干分かりにくい部分もあります。アメリカの APA の場合だと，精神分析に関心がある場合，あるいは精神分析家が集まって，ディビジョン 39 っていう，39 部会といって，心理学の中にそういう 1 つの部会として位置づけられるかたちになっているんですけども。しかし，その領域と他のサイエンティフィックな臨床心理学との統合というか，あるいは連同みたいなものは必ずしもあるわけではなさそうです。そういう印象でした。

以上のような感想からしてですね，現在の日本の状況，本日お話いただいた先生方のお話について考えてみると，まず，伊藤先生の強調されていた実践と研究の不可分性ということで，早い段階から実践にあたっている，その教育のあり方は，ひとつの実践と研究の統合の考え方だと思うんですが，そこにやはり，早期完了の問題がひそんでいないかとも思うわけです。そんなに早い段階から即実践ということがよいのか，あるいは，実践にあたるまでの間に基礎的な理論を勉強したりとか，それから，学習の構えですよね，いろんな最新の情報にアクセスするような，そういうような姿勢とかですね，研究方法を学ぶというような基礎教育みたいなものが，クリニカルサイコロジストには必要ないのかどうかとか。いろんなそういうことも考えなくちゃいけないのかなぁと…。それから，深津先生もおっしゃってましたけど，実際にこの期間でできるのか，それから，学派，実際その学派というものが，いろんな異なる理論があるということですから，どうやって学生がそれを選択していくのか，触れていくのか，この辺の位置づけというのも考えなくちゃいけないと…。それから，野島先生が地域援助の話をされていましたけど，僕は 4 年間経って，日本に帰ってきて，臨床心理学の分野で一番発展しているのはどうも，この地域援助の活動ではないかなという印象をすごく受けたんですね。4 年前とはもう一変してしまって，かなり社会のいろんな場面の中に，臨床心理学的な援助というものが浸透してきたなぁという，そういう印象を受けたんですが。で，逆に言うと，その活動が広がれば広がるほど，多様性，多様な活動が，それにあわせて，実習の場で増えてくる，勉強しなくちゃいけない領域というのも限りなく増えていくわけですから，そうすると，修士レベルでどういうふうに全部するのか，という難しさもまた抱えているとおもいます。で，さらに下山先生のお話は本当に，臨床心理学と心理療法の関係を整理するのに役立ったんですが，私自身，今，この場で一番関心があるのは，その心理学は心理臨床のバックグラウンドになるのかどうか，臨床心理学と心理学との関係はどうなるのか，ぜひこういった点をもう一度考えなくちゃいけないなと，そういうことを思いました。どうもありがとうございます。